

にも大きな文学活動としての意味があったこの時代、歌謡と初期の挽歌の詠み手、受け手双方の意識の関連からしだいに抒情性が進展してゆく様子を考へてみた。三章のテーマは私には重すぎて自分なりの結論をひき出す事が出来なかつたが、当時の私として避けられない問題であるような気がして考へてみたのである。

卒業論文を今反省してみると、出来ればもっと自由に書いてみたかつたような気がする。もっと評論に近いような発想で思ひきつた事を書いてよかつたのではなからうかなどと思われてならない。

△動詞の動作態と助動詞「つ」「ぬ」▽

第一回卒業 古市 久美子

(旧姓 木下)

現在、完了の助動詞とされている「つ」と「ぬ」という助動詞が、どういう意味をあらわすものであり、どういう変化をするものであるかということについては、これまで種々の説がでてゐる。また、助動詞「つ」「ぬ」の意味上の相違については、従来いろいろと論議されてきたが、まだ明確になつていないようである。それらの諸説を大別してみると次のようになる。

(一) 「つ」は他動詞につき、「ぬ」は自動詞につく

(二) 「つ」は意志的・作爲的・動作的・存続的な動詞につき、

「ぬ」は無作爲的・自然発生的動詞につく

(三) 「ぬ」は動作の完了を言い、「つ」は完了と共にその結果の観念を伴うものである

(四) 「ぬ」は状態の発生を、「つ」は動作の完了を示す

そこで、この四つの説をそれぞれの立場で用例(源氏物語に見える助動詞「つ」「ぬ」の用例)にあつて考察検討してみた。

この兩者(一)(二)は「つ」「ぬ」のつく動詞のちがいを問題にする。(三)はそれ自身の意味のちがいを問題にする(密接な関係にあるもので、どちらも等閑視することはできないが、ただ「つ」「ぬ」が接続するのは品詞としての動詞ではなく、述語としての動詞であるということを確認しておいて、この問題にあたらなければならぬということがわかつた。即ち、本来「つ」「ぬ」を伴う動詞があるのではなく、文脈全体の中にその動詞が有しているその場合場合の意味内容に依じて「つ」がついたり、「ぬ」がついたりするものだろうと考えられる。

これは橋本研一先生の御説の如く、動詞の中には一語で「つ」を伴つて過去から現在に至る継続動作の完了を表わす用法と、「ぬ」を伴つて現在から未来にわたる存続状態の発生を示す用法とをあわせ兼ねるものがあり、一語の動詞ではあつても、意味の把握の仕方によつて内容が一樣ではないものがあるのである。

そこで一般的には「つ」が一時的・瞬間的な動作・作用を意味する表現につづくのに対して、「ぬ」は時間的には多く継続的推移を意味する事柄の表現につづく場合が多い。また人間の運命的な事実を述べる場合、時間の経過や季節の推移、天体の運行など客観界における必然的な事実の推移を述べるような場合には「ぬ」が多く用いられて、「つ」は用いられないようである。しかし、これはあくまで結果的に言えることであつて、やはり「つ」「ぬ」の区別を考へる場合には、「つ」「ぬ」それ自体の意味を前後の文脈の意味的なつながりの上において把握していかなければならないのである。

そこで初めて、「つ」は今における動作完了を表わすほか、過去や未来における完了や、または、時には関係なく一般的な事柄としても表わされ、「ぬ」は過去・現在・未来という具体的な時間をもつてあらわれ、あるいは時を越えた一般的な事柄としてあらわれるが、いずれも「そのような状態が発生した」または「そのような状態が発生する」という「状態の発生」を表わすことを意味とするものであるということになるのである。

△和泉式部の表現上の特質▽

——歌と日記との心情の関連において——

第二回卒業 川島 和枝

序論

和泉式部は「うかれ女」といわれてもしかたのない状況に身を置いている。状況という現象面から「うかれ女」と断定し、作品の価値をも規定するものではない。表現上の特質を考察することにより、和泉式部の心情の本質や、作品の価値を定め、また日記と歌集の関連性を追求することにより、和泉式部日記の作者について推論を試みたい。

本論

I 帥の宮挽歌群について

帥の宮挽歌群を構成する一首一首の哀傷歌に表現された和泉式部の心情は、夢の中でさえ会えないほど、つまり一睡もできないほどに、そして和泉式部の生活すべてに、「君をしのび」、「よりてかへてまし」と、帥の宮を悲しんでいる。ここにはかり知れないほどの

嘆きを理解することができる。

和泉式部の悲しみ、嘆きは、何によって慰められるのであろうか。他の男の慰めでは、悲しみは消えない。他の辛さも、嘆きを紛らわせてはいない。失った対象の偉大さを、失うことにより自覚した時、その慰めは、帥の宮でなければならず、宮との一体感を感じることによってのみ慰められるのである。それは、具体的には「あかざりしむかしの事」を書くという行為にほかならないのである。二人の愛の世界——一体感の自覚——の完成を書かずにはいられず、「和泉式部日記」の中に再び二人の愛の極致の追求が試みられたのである。ここに書くという内面的必然性ともいべきものを認めることができる。

II 人物描写について

1章 帥の宮と女の描写

——帥の宮——

帥の宮は、小舎人童が女に語る言葉の中に「帥の宮」とあり、これからあらわれる宮が帥の宮であることを示している。宮の描写は14カ所あり、容姿、状況、性質共に具体的に「なみなみならぬ容姿」と、まめな心を持つ宮のすべてを、賛美するかのように、理想の男性像として描かれている。

——女——

女は、和泉式部だという提示はない。また、宮には容姿についての描写が繰り返されたが、女の場合一言の描写も認められない。

女の人物描写において、女への世評（侍従の乳母の言葉・ある人々の会話）としての描写は、ある程度の非難の込められた表現「状況的あだ」を認めることができる。それに比べると、女に対する帥